

形容詞連用形＋助詞「の」――「多くの」「早くの」「など」

白井清子

キーワード 形容詞連用形・多くの・近くの・早くの・ときじくの

要旨 「多くの」「早くの」などの「多く」「早く」は体言性をもっているが、その活用語尾クは副詞イクバク・シマシク・ソコバクなどの語末クと共通する要素で、それらの副詞がもつ連用機能と体言性を引き継ぐものである。「―くの」の形で表現できる形容詞のうち、「多くの」は「大き」と区別しようとして生じ、多用されている表現だが、この「多くの」も含め、「―くの」と表現できる形容詞は数量・程度・空間・時間に関連するものに限られる。万葉集四四七五番の「恋しくの」の「恋しく」は形容詞連用形ではなくて「恋ふ（動詞）＋き（助動詞）」のク語法である。

一、はじめに

形容詞連用形「多く」「遠く」などの「―く」はさまざまな用法をもつが、その中で次のような用法がある。

おほくの人の身をいたづらになして（竹取物語・みかどの求婚）

この「おほく」に続く助詞「の」は「川のほとり」などと使う「の」と同じ、いわゆる連体助詞の「の」である。連体助詞「の」は、原則として体言に続く。この「の」に前接する「く（形容詞連用形）」も体言としての機能をもっている。前掲の「おほく」も「多数」の意味を表している。このような「多くの」用法は現代まで変わらない。

しかし、形容詞のうち、「く（連用形）＋の」という形をとることができる形容詞はごく限られたものである。そこで、実際に「く」の形をとることができる形容詞はどれほどあるのか、それはどのような性質をもつ形容詞なのか、なぜこの形をとるのかを考えてみたい。（なお、ここでは「痛けく」のような、いわゆるク語法による「く＋の」は含めない。）

二、調査方法および調査結果

現代日本語でも「多くの人が参加した」とか、「遠くの親類より近くの他人」などというように、「多くの」「遠くの」「近くの」などは使う。しかし、やはり、実際の文献で探す必要があるだろう。そこで、国文学研究資料館の『日本古典文学大系』（岩波書店）のデータベースをもとに調査してみた。調査に関しては次のようにした。

○ 「く」の文字列で検索してみた。連体助詞「の」が、その前に来る語が体言であることを知る最も顕著な指標となるからである。（今回の検索では例えば「多（おほく）の」のように、「く」の形でデータに入っているものは含まれていない。）

○ 連用形単独でも、あるいは、「くより」「は」などの形でも、形容詞連用形が体言性をもつことがある。

しかし、それらは体言的用法以外でも使われることがあるので、今回の調査からは除いた。

○国文学研究資料館の『日本古典文学本文データベース』では「近世」の中に書籍版『日本古典文学大系』には含まれない『新本大系』からの作品が含まれているが、それらは除いた。

「く（形容詞連用形）」の形で出てきたものは以下のとおりである。

いたくの あまねくの 多くの 恋しくの 涼しくの 近くの 手近くの 時じくの
遠くの 永くの 早くの ま遠くの

このうち、「恋しくの」「涼しくの」は実は他と用法が異なり、例から除外すべきものと考えるが、それについては後述する。

◆用例について

まず、『日本古典文学大系』にある用例を示す。それについては次のようにする。

○「おほくの」は、上代に一字一音の方葉仮名書きの例はなく、漢字の訓読みの三例しか出てこなかった（注1）。中古から近世まではその時代にも用例が多数あるので、「おほくの」の用例は一部だけ示す。データベースで分類されている時代に従って調べた「おほくの」の用例数は以下のとおりである。（注2）

上代 三 中古 一六二 中世 一〇八 近世 九二

○「おほくの」以外の語はすべての用例を示す。

○用例の最後に掲げた数字は『日本古典文学大系』におけるページと行である。用例中の「」は原表記を示す。

○ 「頭注」とあるのは『日本古典文学大系』の頭注を示す。

○ 「く」以外の部分は表記を変えた場合がある。

A 《おほ(多)く》

a 吾は多(おほ)くの〔多〕国を占めつ(播磨国風土記・讃谷郡) 三二一⑫

b 材器(ざいき)多(多)くの〔多〕雨霧(うむ)を承(う)けむことを好む(菅家文章・巻五・四二四) 四
三五⑦

c 雲のあるこしの白山(しらやま)老いにけりおほくの年の雪積もりつつ(和漢朗詠集・四九七番) 一
七七①

d ……など、おほくの御物語きこえ給ふ(源氏物語・須磨) 一五⑬

e 多(多)クノ仏菩薩、僧澤カ所ニ来(キタ)リ給テ(今昔物語集・巻四・一〇話) 二八六⑫

f 我が句ども多(多)くの集に書き誤り多し(三冊子) 『連歌論集 俳論集』四三三①

g 一たび弥陀を念ずれば即ち多(多)くの罪を滅ぼすを(一遍上人語録) 『仮名法語集』九七⑬

h 今の事をおほくの女共に沙汰せん（好色一代男） 『西鶴集上』四五⑮

これらの「おほくの」は今日と全く同じように使われている。用例cのように歌にも出てくる。「多数」を表すものがほとんどで、用例bのような「多量」を表すものは少ない。

漢文訓読文でも「おほくの」は用いられた。

⑦ 此の初の仏身は衆生の意多クの種（クサ）有ルに随フが故に、種種の相を現（し）たまふ（西大寺本金光明最勝王經古点・巻二）（注3）

⑧ 豈（二）一カ為二而多（ク）ノ人ヲ悩（マス）コト有（ラム）ヤ（興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点・巻四・一七九）（注4）

B 《あまねくの》

a 朋友其外あまねくの人にまじはり申候には（徂徠先生答問書） 『近世文学論集』二〇五⑮

「あまねくの」はこの一例しかない。「あまねくの」は「おほくの」に似た意味をもっている。一方で、「あまねく」は「広く一般に」の意味をもつ副詞としても使われる語である。現に『日葡辞書』（注5）で「Amanei」とは別に「Amanegu」の項目があり、「副詞。一般に、または、あらゆる所に」としている。副詞は「かくのごとく」「少しのけぢめ」の「かく」「少し」のように「の」に続くことが珍しくない。「あまねくの」は「おほくの」と意味が近いから使われたのかもしれないし、副詞として使われたのかもしれない。あるいは、その両方が関与しているかもしれない。

C 《ちか(近)くの》

a 遠く近(チカクノ) 道俗・男女來集(キタリアツマリ) テ(今昔物語集・卷一七・二三話) 五三五②

チカクノという訓みは校注者によるもので、底本にカタカナ表記はない。この部分『新日本古典文学大系』(注6)や『新編日本古典文学全集』(注7)ではチカクとだけ訓んでいる。文脈から考えるとチカクノのほうが自然な語法であるが、ノがカタカナ書きされていないのでチカクと訓むことも否定できない。一方でチカキと訓むと間柄が近い意味になってしまうおそれもある。いまは『日本古典文学大系』の訓に従っておく。

b 右、落花落葉などに、中頃又近くの人もあまたたび詠めることなり(仁安二年八月太皇太后宮亮平經盛家歌合・紅葉二番判詞) 『歌合集』三九六⑨

c 近くの徳大寺左大臣は、……といはれ(無名抄) 『歌論集 能楽論集』四一④

d 此(この)ちかくの事なるべし(宇治拾遺物語・五七) 一五八⑬

a は空間的用法、b～d はいずれも時間的用法で「近頃」「今からそれほど遠くない以前」の意である。

D 《てちか(手近)くの》

a 力もいれずしてまづ手ちかくのつちを動かすやり哥かな(徳和歌後萬載集・七三〇) 『川柳 狂歌集』

頭注には『力をもいれずして天地を動かし』（古今仮名序）のつたないもじり。つちは地ではなく、手近な槌を動かすのだろう。家を建てる時の建て前にも木遣りを歌う」とある。「手ちかくの」は「手近な所の」「手もとの」の意である。狂歌で首数に制約があったので「手ちかくの」という表現を使ったものと思われる。それにしても、もちろん、Cの「ちかくの」の言い方があったからこそ生じた言い方であろう。

E 《とほ（遠）くの》

a 遠くの人は知らず、我（が）ところへ来る人の中には、たれもこの歌の味のしれる人はない（膽大小心録 書おきの事） 『上田秋成集』三六五⑥

b エイ此間はちつと遠（とほ）くの講釈を聞（き）くに行（いき）ますから（春色梅児誉美） 一〇七⑩

a・bともに、空間的な「遠方」の意である。これらの例で、もし「遠くの」の代わりに「遠き」を使うと「空間的距離が遠い」なのか、「間柄が遠い」なのか、あるいは別の意味なのか、その意味が曖昧になってしまう。「遠くの」だと空間的に遠距離の所と意味を明確に表すことができる。今回の調査では近世の用例しか出てこなかったが、上代に次のF「まどほくの」があることを考えると、上代にも「とほくの」の用例があったと考えて差し支えなからう。春日政治は次の二つを「とほく」の体言としての用法に挙げている。（注8）

⑦ 遠自来参 等保久與利万宇支豆（とほくよりまうきて）（御巫本日本書紀私記）（注9）

⑧ 無相の思惟と解脱と三昧とを遠クヨリ修行する故に、是の地清浄にして、障礙有（る）こと無し（西大寺 本金光教最勝王経古点）

F 《まどほ(遠)くの》

a ま遠くの〔麻等保久能〕雲居に見ゆる妹が家(へ)にいつか到らむ歩め吾が駒(万葉集・卷一四・三四四一)

b ま遠くの〔麻等保久能〕野にも逢はなむ心なく里の真中(みなか)に逢へる背なかも(万葉集・卷一四・三四六三)

形容詞「まどほし」は「昨夜(きそ)こそは兎ろとさ寝しか雲の上ゆ鳴き行く鶴(たづ)のま遠く思ほゆ」(万葉・卷一四・三五二二)のように時間的な意味を表すこともあるが、ここの a・b はいずれも「離れた遠い所」という空間的意味である。

G 《はや(早)くの》

a このあひだに、はやくのかみ(守)のこ、やまぐちのちみね、さけ、よきものどももてきて、ふねにいれたり。(土左日記・一二月二八日) 三二②

頭注に「貫之よりも以前の(土佐の)国守の子」とある。この二日前、一二月二六日の文章には「とかくいひて、さきのかみ、いまのも、もろともにおりて、いまのあるじも、さきのも、手とりかはして」とある。この「さき」というのが直前の国守(貫之)であるのに対し、aの「はやくの」とあるのはそれより前の国守であつた人をさすのだと考えられる。「さき」とは区別しようとして「はやくの」を使ったのであろう。

b もろともに朝夕わかず禊(みそぎ)せしはやくの瀬々に思ひ出(で)らるゝ(宇津保物語・国譲中) 一

これは藤壺が女一宮に贈った見舞いの文の中の歌である。朝廷や貴族の年中行事に「七瀬の禊」というものがあり、七つの川や海で禊を行った。そのことを歌に詠み込んでいる。頭注では「こ一緒に朝も夕も禊をした昔の七瀬の祓が思い出されて懐かしい」と訳されている。「はやく」は「昔」「以前」の意。この部分、『宇津保物語 本文と索引』の本文（底本前田本）でも「はやくのせ」となっている。（注10）

c いさら井ははやくのことも忘れじをもとのあるじや面（おも）がはりせる（源氏物語・松風） 二〇三⑭

大堰を訪れた光源氏が明石の尼君の歌に応じた歌である。大堰は尼君が以前住んでいた地である。「遣り水は、ずつと以前の事を忘れてはいないだろうが、あるじ顔しているのは、もとの主人が尼姿になって、以前と面影が變つてしまっているからであろうか」の意。「はやく」は「昔」「以前」を表す。

d 初瀬川はやくのことは知らねども今日の逢ふ瀬に身さへなかれぬ（源氏物語・玉鬘） 三五四⑨

初瀬で再会した玉鬘と右近。「初瀬を訪ねてこなかつたら会うことはできなかつたでしょう」という右近の歌に対して玉鬘が応じた歌である。「初瀬川の早い流れの、その早く（以前）のことを私は知りませんが、今日、お会いすることができて、うれし涙にこの身までも流れてしまいそうです」の意。「なが（流）れぬ」と「泣かれぬ」を掛けている。「はやく」は「昔」「以前」の意。

c・dともに『源氏物語大成』の該当箇所と異文はない。

e わたりするあさゆふふねのつなで繩 はやくの事をおもふあかつき（新撰菟玖波集・一二三）『連歌集』

頭注に「『早くの事』過ぎ去った以前の事。若い頃の事。▽過ぎ去ったかつての事を、色々と思っておして感懐にふける晝の寢覚めである」とある。

a s eの「はやく」はいずれも「以前」「昔」の意味である。「以前」ということばそのものは漢語であるから使いにくいとしても、なぜ「むかし」の語を使わなかったのであろうか。aの場合の「はやくの」では貫之より前の国守の意味になるが、「むかしの」では貫之との結びつきが感じられない一般的な言葉になってしまう。単に事実として「昔土佐の守だった人」となってしまうのではないか。また、b s eの四例はいずれも歌などの中にあつて、ともに川など水の流れの早いことと関連させた表現を使う必要があつた。したがつて、それぞれ「はやくの」という表現がせひとも必要だったのである。もちろん、そうであつたとしても「はやく」が「以前」「昔」の意味を表しうることが前提であるの言うまでもない。

H 《とき(時)じくの》

a・b・c 多遅摩毛理(たちまもり)を常世の国に遣はして、登岐土玖能迦玖能木実(ときじくのかくのみ)……を求めしめたまひき。……天皇既に崩りましき。爾(こゝ)に多遅摩毛理……「常世国の登岐土玖能迦玖能木実を持ちて参上りて侍ふ。」とまをして、遂に叫び哭きて死にき。其の登岐土玖能迦玖能木実は、是れ今の橘なり(古事記・中) 二〇三①⑥⑦

d 天皇、田道間守(たちまもり)に命(みことおほ)せて、常世国に遣はして、非時(ときじく)の香菓(かくのみ)を求めしむ。(日本書紀・垂仁九〇年二月一日) 二七九②

e 田道間守、常世国より至(かへりいた)れり。則ち齋(もてまうでいた)る物は、非時(ときじく)の香

菓、八竿八纒（やほこやかげ）なり（日本書紀・垂仁一〇〇年三月一日） 二八〇②

f 時じくの「不時」玉をそ貫（ぬ）ける卯の花の五月を待たば久しかるべみ（万葉集・卷一〇・一九七五）
頭注には「時じくの 季節にかかわらない」とし、大意に「いつが季節ということもない珠を貫いてかざし
にしています。卯の花が咲き盛る五月を待っていると、待ち遠しいので」とする。

g・h 時じくの「時支能」 香（かく）の木の実を 畏くも 遣（のこ）したまへれ……この橘を 時じく
の「等伎自久能」 香（かく）の木の実と 名づけけらしも（万葉集・卷一八・四一一）

gの「時支能」は本文に疑問があり、別の訓みをする説もある。しかし、「香の木の実」にかかっているの
で「ときじくの」と訓んで差し支えなからう。hの例も含め頭注は「時じくの」を「いつでも季節でない時
はない」とする。

「ときじ」という形容詞が存在したことはトキジクだけでなく、トキジキ・トキジケ・トキジミ（ミは「山
高み」などのミと同じ）の形があるから確かである。トキジのジに關しては古くから諸説あるが（注11）、「時
じ」が特定の時節に限定されていないことを表し、それが「常に」の意味にも「時節はずれに」の意味にも
なっていることは諸説認めるところである。「ときじくの」の八例中、f以外の七例が「かくのこのみ」「か
くのみ」と続き、橘を指している。

I 《なが（永）くの》

a 「奈良坂ニシテ盗人ト戦ヒシテ、被射（イラレ）ニケリ」ト被云（イハレ）バ永クノ名也。（今昔物語集・
卷一九・三五話） 一一九⑬
頭注に「後後までの汚名・悪名」とある。

b 「墓々シクモ非（アラ）ヌガ被書（カカレ）テ候ハム、公任ガ永クノ名ニ可候（サブラフベ）シ」（今昔物語集・卷二四・三三話） 三二七⑧

bは「公任大納言、読屏風和歌語」の話。上東門院（藤原彰子）入内の際に屏風を新調した。その屏風の色紙形に書く歌を多くの歌人が任された。公任も歌を詠むことになったが、当日一人公任は遅れてやってきた。そのときの言葉である。「他の人の歌を採りあげずに、碌でもない自分の歌が書かれましては、永く汚名を流すことになるでしょう」と述べる。しかし、無理やり責められ、「此ハ長キ名カナ」（三二七⑭）と言いつつ披露した歌はすばらしいものであったという。

この説話の一つ前、卷二四の三三話でも、「此ノ（すばらしい歌の）返シ、更ニ否（エ）不為（セ）ジ。劣（オトリ）タラムニ、長キ名ナルベシ」（三二六⑦）とある。類義の表現を「永クノ名」とも「長キ名」とも表現している。強いて言えば「長キ名」は「長く続く名」の意味になるのに対し、「永クノ名」のほうは「永く（だめな人だと）言われる名」となる。用例はすべて今昔物語集の例であるが、どちらの表現も舌足らずの表現である。また、「長キ名」は別の状況下では名前が何文字にもなる名と解釈できる場合があるのではないだろうか。それを考えれば、「永くの名」のほうはまだ誤解されにくい。

J 《いたくの》

a 「御身もいたくのかひなしにてはなけれども、さ程の大事に逢（あふ）べき器にはあらず」（古今著聞集・三七七） 三〇〇③

相撲の節に召されて越前国から出てきた男は女に出会った。その女が気に入って、ついていったところ、女にこんな言葉を言われてしまう。頭注には「ひどい役立たず」とある。この「いたくのかひなし」を「いた

きかひなし」とすると、「いたきかひ・なし」と理解されてしまう。「ひどい」のように程度を表す形容詞の場合、連用形「ひどく」で表されることが多いから、「ひどく甲斐性のない者だ」と連用形を用いて副詞のように用言にかかつていけば問題ない。しかし、「こ」では「かひなし（甲斐性なし）」という体言を用いようとした。そこで、やむなく「いたくの」という表現をとることになったのではないだろうか。この「いたくの」を「副詞十の」ととることももちろん可能であるが、形容詞としての可能性も有するので今回はここに含めた。

K 《こひ（恋） しくの》

a 初雪は千重に降りしけ恋しくの〔故非之久能〕多かるわれは見つつ惚はむ（万葉・巻二〇・四四七五）

この歌は大伴池主の宅で宴のあった折に大原今城が作った歌である。頭注で、「恋しく」は「恋しいこと」とし、大意に「恋しいことの多くある私は」とある。「恋しく」を形容詞連用形の体言的用法に解釈していると受け取れる。しかし、筆者（白井）はこれを「恋ひき」のク語法だと考える。これについては後述する。

L 《すずしくの（涼）》

a 橋の夕暮来て見れば。本フシ涼（すだ）しくの文字象（かたど）りて。京を持ちたる京橋に。ひとつ流（ながれ）の禊川末吹く風も。フシ袂涼しきハルフシ 権三おさゐは（鑓の権三重帷子）『近松浄瑠璃集上』二八四⑬

この作品の終わりに近い場面で、権三とおさゐが伏見の里にある橋の所にやってきた場面である。頭注に「涼」という字に似せ、その扁のシを取った京という名を持った京橋とある。「京橋」という橋の名を表すの

に、「京」を『涼しく』の涼の漢字からサンズイを取った字だとしている。それを『涼しく』の文字」と表現しているのである。したがって、これは引用を含む用法なので、AとJの「形容詞連用形十の」の用法とは別のものである。それにしても、「涼」の文字をいうのになぜ『涼しい』の文字ではなく『涼しく』の文字」なのであろうか。連用形の使用度数が多いということと関連するのだろうか、よくわからない。

以上が上代く近世の文献で拾うことのできた「形容詞連用形十の」の例である。

これを筆者が「恋ひき」のク語法だと考える「恋しくの」と、引用を含んで「涼しくの」となっている二語を除いて、時代ごと、単語ごとにまとめたものが「表1」である。

三、考察

まず、用例と表1からよみとれることをあげてみる。

○「―くの」はごく限られた形容詞にしか見られない。「おほくの」以外は使用度数も少ない。

○ク活用のもが多く、シク活用は「時じくの」だけで、上代に出てくる語である。

○現代語で用いるのは「多くの」「近くの」「遠くの」だけで、しかも現代語の「近くの」「遠くの」は空間的用法に限られる。しかし、近世以前は少ないながら、現代では使われない形容詞でも使われていた。

○通常の連体形を用いると意味が曖昧になってしまったり、別の意味になってしまったりする場合に、それを避け、意味を明示するために「―くの」を用いていることが多い。

表1 時代別用例数

	上代	中古	中世	近世
時じくの	8			
ま遠くの	2			
多くの	3	162	108	92
早くの		4	1	
永くの		2		
近くの		3*	1	
手近くの				1
遠くの				2
いたくの			1	
あまねくの				1

*今昔物語集の訓みに疑問のある1例を含む

○数量・程度・空間・時間に関する意味を表す形容詞に限られている。

数量 (多くの・あまねくの)

程度 (いたくの)

空間 (近くの・手近くの・遠くの・ま遠くの)

時間 (近くの・早くの・時じくの・永くの)

では、なぜこのような限られた形容詞に「―くの」の用法があるのだろうか。

そもそも、形容詞連用形の活用語尾クに関しては、多くの研究者が副詞などに多い「―く」との共通性を指摘している(注12)。阪倉篤義は関連のある語として次のようなものをあげている。(注13)

シマラク (シバラク) ココダク シマシク ケダシク ゴトク コトゴトク
ソコバク フツク イタク スコシク モシク (ハ) シカク

そして、阪倉はおおよそ次のようにいう。

これらの語は元来、クがなくても成立していた語であるが、それらにクが加わることで副詞的機能をたしかなものにしている。このクはイヅク(何処)・オクカ(奥処)のクやカとも通じる形式名詞に近い性質をもったものである(注14)。体言と副詞との関連は現代語で「うまいことやれよ」と「うまくやれよ」が近い言い方であることと通じるものである。

この阪倉説を受け、川端善明は概略次のように言う(注15)。

形状言(形容詞の語幹など、形状を表す意味の中心部分——白井注)には体言や用言を修飾する用法があった。

タカヤマ(高山)・ハヤトリ(早鳥)——タカユク(高行)・フトシク(太敷)

これらの用法のうち、タカヤマ・ハヤトリのように体言を修飾して複合をなす用法は多くの形状言で可能であるが、タカユク・フトシクのような複合をなして成立する語は限られた形状言でしか起こらない。そのような複合が可能なのは、タカ（―敷く・知る・照らす・飛ぶ・成す・光る・行く）・フト（―敷く・知る）のような讚めことば風に運用された形状言や、フタ（一、―並ぶ・行く・渡る）・ナナ（七、―行く）のような数詞、或いはイヤ（彌、―なく・立つ）・シバ（数、―立つ・鳴く）のような数量的なものとしての形状言にほぼ限られ、決して形状言に一般的な在り方とは言えないのである。

このように限られたものにしか連用的機能がなかった形状言であるが、その形状言（形容詞語幹）に、形式名詞クが接続すると、例えば「ハヤ（早、形状言）＋ク」はハヤトリと同じような構造になる。同時に、シマラク・ケダシクなどの副詞が、クが備わることによって副詞的機能をたしかなものにしたように、形状言（形容詞語幹）もクが加わることによって副詞的機能（連用修飾の機能）が確かなものになっていったのだと川端はいう。

ここで、再度確認しておくが、「―ク」の形をもつ副詞は確かに副詞としての連用機能をもつが、一方で連体助詞「の」に接続することもある。すなわち体言性ももっている。（ただし、副詞の体言性は―クの形のものだけに限らない。）

- ㊦ 許多（ここだく）の〔許々太久乃〕罪出でむ（祝詞・六月晦大祓） 四二五⑧
- ㊧ いくばくの田を作ればか（古今集・一〇一三）
- ㊨ とかくの事（源氏物語・夕顔） 一五七⑦
- ㊩ そこばくの神々集まりて（更級日記） 四八八①
- ㊪ かくの（こ）とくの無益（むやく）の事を（宇治拾遺・九〇） 二〇九⑩

では、副詞は「―く」の形をもつ語が多いかという点、実はそうでもない。「―く」の形の副詞は、数量や程度（コキダク・ココバク・ソコバク）、時間（シマシク・シマラク）を表す語に多く、そのほかではケダシクのような陳述副詞にもみられるが、いわゆる情態副詞の類にはない（注16）。これは「形容詞連用形―く」の形をもち、副詞性と体言性を有する形容詞が数量や程度・空間・時間を表すことと多くの部分で重なる。逆にいえば、「―く」の副詞のもつ数量・程度・時間と共通する意味をもつ形容詞だけがその連用形に連用機能と体言性をもつことができたといえるのではないだろうか。ただし、ここで注意しなければならぬのは、形容詞連用形の「―く」が副詞の「―く」と関連があるとしても、それら「―く」の副詞がもつていた連用機能と体言性をすべての形容詞がもつことになつたわけではなく、数量・程度・時間に関連した形容詞だけが連用機能と体言性をもつことができるに至つたのではないだろうか。「―く」の形容詞のうち、空間に關係する意味をもつものがあるのは、クが元来、イツクなど空間を表すクと関わりがあるからかもしれない。

四、「恋しくの」について

ここで、さきにとりあげた『万葉集』四四七五番「恋しくの多かる我は」の「恋しくの」について述べる。この歌について詳しく調べてみると、この「恋しく」には次の二つの説がある（注17）。

⑦ 形容詞「恋し」の連用形でその体言的用法だとするもの

⑧ 動詞「恋ふ」に過去の助動詞「き」がついた「恋ひき」のク語法だとするもの。

ちなみに、過去の助動詞「き」のク語法が「しく」となるのは、「そがひに寝しく今し悔しも」の「寝しく」をみればわかる。

⑦では「恋しく思うこと」の多い私は「の意味になる。⑧では「恋しく思つてきたこと」の多い私は」となる。四四七五番の歌に關しては⑦⑧両説が拮抗していて決定的な決め手がないようにみえる。

そこで、「形容詞連用形―く＋の」について考えてみると、前述したように他の「―くの」は数量・程度・空間・時間に関する形容詞に限られる。それらと比べると形容詞「恋し」の意味はいかにも異質である。また、関連があると考えられる「―く」の形の副詞に情態を表す語がないことも前述したとおりである。ク語法だと解釈しても意味的に問題がないのであるから、これは「恋ひき」のク語法だとしたい。『万葉集』巻一〇、二〇―七番の「恋しくは日(け)長きものを」と同類の表現だと考えれば、④説がさらに強化される。ちなみに、二〇―七番の「恋しく」については『日本古典文学大系』でも「恋ひき」のク語法だとしている。

五、「多くの」について

しかし、それにしても、「おほくの」は他の形容詞に比べてその使用数が際立って多い。それには、この形容詞特有の事情があると考えられる。

周知のように古く上代では「おほ」は「大」と「多」の両方を表した。

オホブネ(大船) (万葉集・巻一五・三六一―)

オホユキ(大雪) (万葉集・巻一九・四二八五)

オホキも「大」「多」の両方を表していた。

大き戸(於朋耆妬)より窺ひて(日本書紀歌謡・一八の一)

春されば木がくれ多き(多)夕月夜 (万葉・巻一〇・一八七五の一)

しかし、「おほき＋体言」は圧倒的に「大」の意味を表すものが多かった(注8)。「多」の意の「おほき」は前掲のように「Xが多いY」の形で用いられる。「Xが」の述部をなし、かつそれ全体が「Y」にかかっている。いきなり「おほき＋体言」の形で用いられると「おほき戸」のように「大」の意味になってしまう。したがって、述部を表すことなく「多」の意味の連体機能をもつ形を必要としていた。そんな中で生じたのが

「おほくの」の形であつたのであろう。

オホはその後、「大」の意味では「大きなり」を生じ、「多」と別の道をたどつていった。「多」も平安時代和文では「おほかり」のカリ活用系統を使うことによつて、「大」との混用を避けていった。しかし、この段階になつても「おほき」は「大」につながる形であるから、「多である十体言」を表すのに「おほき」以外の形が必要だつた。そこで「多くの」がずっと使われ続けた。しかも、この「多くの」は前述したようにどの時代にも多用されているので、その変則的な形がずっと変わらずに存在している(注19)。

六、終わりに

以上のように、「形容詞連用形 ーく十の」は数量・程度・空間・時間に関する意味をもつごく限られた形容詞においてのみ可能な形であつたことがわかつた。

しかし、現代語でどうして「多くの」「近くの」「遠くの」しか残っていないのであるうか。あるいは、どうして残つたのであるうか。それは例えば「早くの」なら「以前の」とか、「永くの」なら「後世までの」とかの漢語を使った表現が使われるようになったことと関係があるかもしれない。一方で、「多くの」は前述したような理由があるから当然使われるとしても、「近くの」「遠くの」の場合も、「近所の」「近郊の」よりも「近くの」が、「遠方の」よりも「遠くの」のほうがまだ使いやすい場面があるというところだろう。

「形容詞連用形 ーく十の」の問題に関連して、形容詞型活用形をもつ助動詞とされる「ごとし」についても、「如くの」と「如き」の二つの言い方(例えば、「かくの如くの十体言」と「かくの如き十体言」)がなぜあるのか、何が違うのかが疑問点として浮かんでくる。しかし、今、これについて答えることは筆者にはできない。今後の課題としたい。

注

1 上代の「おほくの」の三例のうち、A aの例に示した以外の他の二例は次のものである。

a 已(すで)に多くの「多」日を経ぬ(日本書紀・神功・摂政元年二月) 三四四⑩

b 既に多くの「多」日を経て(日本書紀・履中六年二月) 四二八⑪

2 使用したデータベースでは、例えば中古に分類されている『歌合集』の中に「中世編」というのがあって、

そこには中世の作品が含まれている。しかし、今回はおおまかな時代を知らなければよいので、こういう場合も

『歌合集』にある用例はすべて中古のものとして数えた。

なお、おもな作品における「おほくの」の用例数はつぎのとおりである。

宇津保物語 六六 源氏物語 一六 枕草子 〇 今昔物語集 一三

栄花物語 一六 宇治拾遺物語 二二三 徒然草 六 平家物語 二二一

太平記 四 好色一代男 二二 冥途の飛脚 〇 東海道中膝栗毛 一

3 『春日政治著作集』別巻 西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』 勉誠社 一九八五年六月

p 一四五～一四六 用例は p 二五 一〇行目

4 築島裕編『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』 東京大学出版会 一九六五～六七 年によ

る。用例は p 一三二 3行目

5 土井忠生他編訳『邦訳日葡辞書』 岩波書店 一九八〇年による。

6 小峯和明校注『新日本古典文学大系 今昔物語集四』 岩波書店 一九九四年 p 四二一

- 7 馬淵和夫他校注『新編日本古典文学全集 今昔物語集二』小学館二〇〇〇年 p.三四七
- 8 注3前掲書 p.一四六
- 9 『新訂増補国史大系8 日本書紀私記』p.六九〜七〇に該当箇所(乙本)がある。
10. 宇津保物語研究会編『宇津保物語 本文と索引』笠間書院 一九七五年
11. 橋本四郎「上代の形容詞語尾ジについて」『万葉』十五号 万葉学会 一九五五年四月
原田芳起「上代形容詞接尾辞」『樟蔭国文学』十二号 大阪樟蔭女子大学国文学会 一九七四年九月など
12. 阪倉篤義『語構成の研究』角川書店 一九六六年
川端善明『活用の研究 II』大修館書店 一九七九年
馬淵和夫『古代日本語の姿』武蔵野書院 一九九九年 など
13. 阪倉前掲書 p.三二九〜三三〇
14. 阪倉や川端らは副詞などのークとイツク(何処)のクを、ク語法のクと関連させて考えているが、筆者(白井)はそれには首肯できない。ク語法に関しては大野晋説(『日本古典文学大系 万葉集一』解説など)の
ほうがよいと考える。
15. 川端前掲書 p.四〇九〜四一〇

17. 『万葉集』四四七五番の「恋しく」の解釈について

㊦ 形容詞「恋し」の連用形でその体言的用法だとするもの（口語訳から推測したものを含む）

土屋文明『万葉集私注』筑摩書房 一九五六年

大野晋他『日本古典文学大系 万葉集』岩波書店 一九六二年

小島憲之他『新編日本古典文学全集 万葉集』小学館 一九九六年

伊藤博『万葉集釈注』集英社 一九九八年

㊧ 動詞「恋ふ」に過去の助動詞「き」がついた「恋ひき」のク語法だとするもの

武田祐吉『万葉集全注釈』改造社 一九四九年

窪田空穂『窪田空穂全集 第十九卷 万葉集評釈』角川書店 一九六七年

澤潟久孝『万葉集注釈』中央公論社 一九六八年

青木生子他『新潮日本古典集成 万葉集』新潮社 一九七四年

木下正俊『万葉集全注』有斐閣 一九八八年

佐竹明広他『新日本古典文学大系 万葉集』岩波書店 二〇〇三年

18. 『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂 一九六七年）の「おほき」の項など参照。

19. 変則的なものでも使用頻度が高いと、その変則的な表現が続いていくことがある。例えば、動詞の力変・サ変など。